

エラスムスの *De votis temere susceptis* (1522) について

木ノ脇悦郎

ルターは、1520年宗教改革を推進するための代表的な著作を公にしている。『キリスト者の自由』『ドイツキリスト教貴族に与える書』『教会のバビロン捕囚』を通常宗教改革の三大著作と呼んでいる。中でも後の二つの著作は、当時の教会と社会の問題を鋭く抉り出し、その問題の根源をカトリック教会のありように言及して教会改革への取り組みを推し進めようとしたものとして知られている。そこには、当時の教会に一般的であった信仰的慣習や迷信を鋭く批判していくルターの激しさが見られる。中でも巡礼についての批判は、罪の救済との関係において欠くことのできないものであったといえる。ルター以後の改革者たちも巡礼については同様に鋭い批判の目を向けていた。カルヴァンやティンダールの名前を挙げておくだけでよいであろう。つまり、それほどに中世を通じて巡礼への一般的関心が高く、それを高度に信仰的行為として重んじる風があったという状況の反映である。勿論、そのように一般化していく巡礼行に伴ってさまざまな道徳的問題も生じていたことは想像に難くない。

ところで、エラスムスは年々書き加えてその数を増していく対話を新しい『対話集』として精力的に出版していった。1516年の『校訂版新約聖書』出版以来、ヨーロッパの人文学者はもとより、宗教改革者達からも関心を向けられるようになったエラスムスは、カトリック教会にありながら教会の改革を唱え、多方面に与える影響も大きかったことから、カトリックの保守的神学者達にとっては危険な存在と映っていた。しかも、当初ラテン語の教本として意図されていた『対話集』の内容に当時の社会や教会への痛烈な批判、皮肉が込められるようになると、エラスムスへの批判は強まっていくのである。特に、『対

話集』についての批判に対しては、1526年に「対話の有用性について」*De utilitate Colloquiorum* という論文を書き、批判を受けた対話についての弁護を試みている。しかし、その内容の大半は、批判の趣旨をそらしたり、言を左右にして批判のための決定的な言質を取られないようにしており、なされた批判を正面から受けてまっとうな反論をするというような類のものではないという印象を強くさせられるものであった。

ところが、ここに訳出した1522年版初出の *De votis temere susceptis*（無造作な誓いについて）の弁護は、他のものと大きくその性格を異にしていることに注目しなければならない。つまり、当時一般的であった聖地巡礼について、その無益さと反宗教性をはっきりと断言して憚らないのである。その要点は次のとおりである。

まず、彼はこの対話の目的は、エルサレム巡礼がさも聖性を高め、信仰的な行為であると夢想している人々の迷信的な考え方を明らかにし、それに警告を与えることであると明言している。その迷信とは、人間の日常的な義務を放棄して、あたかも何か尊く価値のあることをしていると思い込む人間の不信仰、愚かさ、向こう見ずを生み出すものである。それは、決して聖なる行為とはいえないものであると警告を発している。そのため、パウロの手紙から次の句を引用している。「自分の親族、特に家族の世話をしないものがいれば、そのものは信仰を捨てたことになり、信者でない人にも劣っている」（1テモテ5:8）と。それは、巡礼に行くことによって世話の必要な妻や子供を捨てることになり、これほどの不信仰な行為はないというのである。従って、この対話は本当の信仰のために寄与できる他のことを求めるように有益な警告を与えるものであるとしている。しかも、その中であまり遠くない過去に起った実例を示している。富裕な人物が、自分の妊娠中の妻や財産や城を主教に委託して巡礼の旅に出たというのである。ところが、その人の死の噂が伝わると、その主教は保護者の立場を一転して強盗になり、すべてを奪ってその人の妻を追放するという悪行を行っているのである。危険で不必要な旅をこの夫に思いとどまらせるのが信仰的な業であるにもかかわらず、巡礼をさも信仰的であると薦める一方

で、強盗になってしまう主教の存在も巡礼にまつわる問題点であったといえよう。

また、エラスムスはその弁護の中で、贖宥の問題についても触れている。つまり、信仰を駄目にしてしているものとして「贖宥を否定している者」をあげているのであるが、それと同時に「自分の生活を修正する考えさえも無しに人間的な許しにその全希望を置いているような全く軽薄な人」また、「自分が得べき許し以外のものを得ようとする人たち」を非難している。この内容は、後に本文に加えられた付加にも現れており、エラスムスに対する批判の材料として作用していた贖宥問題について防御する意図もあったことであろう。それ故、贖宥の問題についてはカトリック教会の立場を堅持しつつ、しかしその本来性を離れて拡大解釈されている贖宥制度の問題及び迷信化した民衆の受け止め方の問題として批判的に取り上げているのである。このような明確な批判的言辭はエラスムスには珍しい論調であるといわねばなるまい。しかし、同時に『対話集』の多くの作品の中で、生活と遊離した所に成り立っている信仰のあり方に対しては、様々な仕方で批判を明らかにしていることも事実である¹。

次に、この対話に登場する話者について述べておこう。名前に特別な工夫が施されるようになるこれ以後の対話と違い、実在の人物を直接登場させているといわれる。話者、Arnoldus と Cornelius は、おそらく二人の友人 Arnoldus Bostius (1446–1499)²と Cornelius Gerard (1460–1531)³である。Arnoldus は、

1 このような状況批判の対話は多くあるが、特に以下の拙訳を参照のこと。「エラスムスの *Militis et Cartusiani* (1522) について」『福岡女学院短期大学紀要』第22号1986、「エラスムスの *Exorcismus* (1524) について」『福岡女学院短期大学紀要』第23号(人文科学) 1987、「エラスムスの *Peregrinatio religionis ergo* (1526) について」『福岡女学院短期大学紀要』第27号(人文科学) 1991、「エラスムスの *Exequiae Seraphicae* (1531) について」『神学研究』第44号 1997、このうち特に1526年に公にされた *Peregrinatio religionis ergo* は、直接に巡礼行を問題にした対話であるが、かなり洗練された構成になっており、今回翻訳したものは同じ問題を直裁に批判的に取り上げているという点で注目すべきものである。

2 Ed. Peter Bietenholz, *Contemporaries of Erasmus: A Biographical Register of the Renaissance and Reformation*, Vol. I, Univ. of Toronto Press, 1985, p. 176参照。尚、この項目の筆者である Gilbert Tournoy は、この対話の話者の一人として Arnoldus とそれを同一視する理由はないと批判している。

3 Op. cit., Vol. II, p. 88–89

ゲント生まれでその土地のカルメル会修道院に入り、何度かその修道院長にも選ばれた人物で当時の学者や人文学者と多くの交わりを持ち、イタリア、パリ、オランダの人文学者達の交流に中心的役割を果たした人物である。ただし、本文中では妻帯していることを示す台詞があるので、その部分についてはエラスムスの創作と見るべきであろう。Corneliusはゴータ生まれで、エラスムス同様アウグスティヌス修道会士であり、彼の初期の書簡相手（1489年に多数の往復書簡のシリーズを見ることが出来る）、また親友であった。エラスムスに神学への方向付けをなしたのも彼の影響によることが大きいといえる。後に、彼はオランダで宗教詩の作者としての名声を得ることになる。この対話が書かれた1522年にはArnoldusは既に没した後であり、Corneliusはまだ存命中ということになる。しかし、登場人物が必ずしも実際の年齢で描かれているわけではないので、それぞれの立場からそれらしい口調に訳すよう試みた。

最後に、この対話の表題についてその経緯を述べておくことにしよう。初出の1522年版においては、まだこの表題はついておらず、この表題が初めて現れるのは1524年9月にバーゼルのフローベン書店から出された版で、ページの上部に示されている。しかも、それは *De visendo loca sacra* つまり「聖地見物について」となっており、先に触れた1526年の *De utilitate Colloquiorum* においてはエラスムス自身そのように表記している⁴。しかし、1524年9月新版以後は *De votis temere susceptis* と表記されるようになり、現在の諸版ではすべてこの表題が用いられるようになった。

尚、この翻訳の底本としては、最新の校訂版全集 *Opera Omnia Desiderii Erasmi Roterodami* 1-3を用い、適宜1677年アムステルダム版の *Desid. Erasmi Roterodami Colloquia nunc emendatiora Cum omnium Notis*, Amsterodami, Typis Danielis Elzevirii, 1677をも参照した。

4 *Opera Omnia Desiderii Erasmi Roterodami*, 1-3, North-Holland Publishing Company Amsterdam, 1972, p.742（以下、ASD、1-3, p.742のように表記する）

無造作な誓いについて

Arnoldus, Cornelius (以下、Ar, Co と略記)

Ar. おやまあ、ごきげんよう、コルネリウス。随分長いことお目にかかりませんでしたね。

Co. これは、親愛なる御同僚。あなたも、お元気で？

Ar. 実のところ、私たちはあなたの帰りを絶望していたのですよ。一体、こんなに長い間、何処を回っていたのですか。

Co. 地獄といったところですか。

Ar. ご冗談を。それにしても、あなたは本当に汚れて、瘦せて、青白くなっていましたね。

Co. 確かに、私は深淵から戻ったのではなく、エルサレムから帰ってきたのですよ。

Ar. どんな神、あるいは宿命があなたをそんな所まで駆り立てたのでしょうか。

Co. そんなことをさせるのに、他に何かありますか。

Ar. 間違いでなければ、愚かさということでしょうか。

Co. ですから、私だけが非難されるというわけではないでしょう。

Ar. 一体、あなたはそこで何を求めようとしたのですか。

Co. どうすれば不幸になるかということでしょうか。

Ar. そんなことは家でも出来るでしょうに。本当は、そこに何かしかるべきものがあるとでも考えたのでしょうか。

Co. ああ。でも、正直に告白すると、何もないのですな。昔の古い記念碑のようなものが何かあったのですが、私にはどれもこれもわざと作られたものと思えませんでしたね。まるで、単純で信じやすい人たちを惹きつけるために考え出されたものという具合で⁵。勿論、私はそんなものでエル

5 このような表現の中にエラスムスの非理性的な迷信への痛烈な皮肉を見ることが出来るであろう。

サレムが以前あった場所を知ることが出来るなどと考えはしませんがね。

Ar. それじゃ、一体何を見たのですか。

Co. 何処にでもある非常な野蛮さですな。

Ar. 聖められてきたのではないのですね⁶。

Co. いや、むしろ多くの点で、もっと下等になったでしょ。

Ar. では、もっと金持ちになったとか？

Co. とんでもない、もっともっと素寒貧になっちゃってね⁷。

Ar. それなら、あなたはそんなに長い巡礼の計画が無駄だったと後悔しているわけですか。

Co. 恥じてはいませんがね。だって、愚かな仲間をたくさん見つけましたしね。後悔なんかしてませんよ。後悔したって無駄だし。

Ar. しかし、まあ、そんなに大変な巡礼をしながら収穫は何もなかったのですか。

Co. いっぱいあるんですよ。

Ar. 一体何を得たのでしょうか。

Co. その後の心地よい生活ですね。

Ar. 過ぎてしまった苦労を思い出すのが気持ちいいというのはですか⁸。

6 巡礼が聖性を高めるという当時の迷信に対して批判を込めて語らせた台詞であり、「対話の有用性について」の中でも、その冒頭において「聖性の基本がエルサレムを訪問することにあると考えているある人々の迷信的で恥ずべき夢想を明らかにしたものである」と、この対話の目的を述べている。ASD, I-3, p.742参照

7 Nudior leberide、ギリシャ語の Γυμνότερος λεβηρίδος であり、ラテン語で Nudior leberide と示される。leberidis というのは蛇の抜け殻を意味し、極端な貧困を表すものであることから本文のような訳を当てはめた。エラスムス『格言集』の中に採用された言葉である。Adagia I, i, 26 ASD, II-1, p.138

8 iucundum.....actorum, エラスムスは『格言集』の中で iucunda malorum praeteritorum memoria を説明し、この格言が詩から取られたものであるとして、ギリシャ語の Ἀλλ' ἔδω τον σωθέντα μεμνήσθαι πόνων を取り上げ、これに Meminisse laborum suave qui servatus est. つまり、「奴隷は苦役を快く想い出す」と過ぎ去った困難を忘れる快適さを意味するラテン語を当てはめている。日本語の「喉元過ぎれば熱さを忘れる」に相当か。Adagia 3827, ASD, II-8, p.190-91 ASD 版の校注ではアリストテレス『修辭学』I, II, 8とエウリピデースの断片の中にも見られるとしている。

- Co. それもありますが、それだけじゃありませんな。
- Ar. 他にも、得るものがあつたと？
- Co. 勿論、いっぱいありますよ。
- Ar. 为什么呢。聞かせてください。
- Co. 自分の旅について、ちょっとした集まりや宴席でおしゃべりして、時々自分や他の人を騙したり、面白がらせたりして味わう気持ちよさは格別なものですからな。
- Ar. そうですね。そのために集まっているのでしょうか⁹。
- Co. それに私も、今まで聴いたことも見たこともないようなことについての嘘を他の人が言うのを聞いてとても楽しむのですな。しかもです、彼らはシシリー人のように法螺を吹いているのに、自分が本当のことを話しているように思い込むという大変厚かましいことをやらかすのですな。
- Ar. それは、まあ、大変な楽しさですね。諺どおり「油と仕事なくなることはない」¹⁰わけですか。
- Co. 勿論。傭兵が少しばかりのお金のため、あらゆる冒涇を教える学校とでもいうべき軍隊に入るよりは、はるかにそのほうが忠告も得られるというものでしょう。
- Ar. しかし、嘘で楽しむというのは、その楽しみはあまり感心できるものではないですね。
- Co. そうでしょうか。人を中傷して楽しんだり、楽しませたり、あるいはさいころ遊びに時間や財産を浪費するよりはるかにましじゃないでしょうか

9 non.....scopo, 本来は「目的を達する」という格言を言い換えたもので、ギリシャ語の *Τυχάνειν τοῦ σκοποῦ*, ラテン語では *Scopum attingere* に相当する。『格言集』ではルキアノス、ディオゲネス、ピンダロスなどの用法を取り上げている。Adagia 930, ASD, II-2, p.436. 本文では「目的から遠く離れていない」というのを意識した。

10 *perit oleum et opera*, 「そこで、誓って私は油と仕事を失ったことは無かった」(*Tum pol ego et oleum et operam peridi*) という格言を利用したものであり、その意味するところは、無駄に費やされることのない事柄や労苦に関係するものである。「転んでもただでは起きない」という類であろうか。Adagia 362, ASD, II-1, p.452-53

な。

Ar. 肯くより仕方ありませんね。

Co. 成果は他にもありますよ。

Ar. 何でしょう。

Co. とても大事な親友がいるなら、私はそんな狂気に捕えられるよりは家にじっとしているように彼に忠告したいと思いますな。それは、あたかも難破したことがある水夫が、危険が待ち構えている航海について注意したいと願うのと同じことでしょうな。

Ar. ああ、私にもあなたの警告が間に合えばよかったのですがね。

Co. 何ですって。それじゃ、あなたも同じ病気に取り憑かれてしまったのですか。この性悪な伝染病に感染してしまったのですか。

Ar. 私は、ローマとコンポステラを訪ねたことがあるのですより。

Co. なんとまあ。あなたも愚かな仲間に入っていたとは、ああ、安心した。一体、かのパラスはあなたの心に何を吹き込んだのですかな。

Ar. パラスではありませんよ。モリア自身なのです¹¹。その時、家にはまだ健康で、若い妻や子供や家族が居り、彼らは私に頼っていて、私の毎日の働きで彼らを養っていたのですよ。

Co. 最愛の人達から引き離されるというのは深刻なことだったでしょう。さあ、話してください。

Ar. 話すのさえ恥ずかしいことです。

Co. 恥ずかしがることはありません。ご存知のように私だって同じ災難に取り憑かれたのですからな。

Ar. 何人かの隣人達と酒盛りをしていたのですよ。酒で心が熱くなってくる

11 巡礼が好んでいった場所としての三大聖地、エルサレム、ローマ、コンポステラを指しており、特にコンポステラについては、先にあげた *Peregrinatio religionis ergo* で詳しく取り上げている。註1参照。

12 Pallas は Athena と同じで、ローマ神話の Minerva と同一の神であり、知恵、芸術、戦術の女神であることから、ここでは皮肉たっぷりにパラスを登場させ、次にパラスではなくモリア即ち愚神そのものの仕業として巡礼に駆り立てられていったと逆転させている。

と、ある人は自分が心の中で聖ヤコブを敬っていると言い、ある人は、いや聖ペテロだということです。そこで、何人かは何時か一緒に出かけようと約束したのですが、結局は皆で一緒に行こうということになったのです。私は飲み友達として、友達甲斐がないと思われたくなくて一緒に行く約束をしてしまったのです。そこで、急いで計画を立て、ローマにするかコンポステラにするかということになり、結局、両方にということになったのです。幸先がよいというので、次の日に旅立つことにしたのです。

Co. なんて乱暴な決定を！そんな約束は、固く守られるよりも酒と一緒に流してしまうほうがふさわしいものでしょうに¹³。

Ar. それから、大きな器で順番に回し飲みをしました。決められた約束が犯しがたいという印です。

Co. 変わった聖約ですな。ところで、皆さん無事にお帰りになったのでしょうか。

Ar. 三人を除いて、皆無事でした。一人はペテロとヤコブの両方に敬意を表すべきだと言っていた人なのですが、彼は旅の途中で亡くなりました。もう一人の人は、その妻と子供によろしく伝えてくれと頼んでローマで亡くなりました。三人目の人は、フィレンツェに残っていましたが、病気でいけなくなりました。今は天国にいると思いますよ。

Co. そんなに敬虔な人だった？

Ar. とんでもない、大変な放蕩者でしたよ。

Co. では、どうして天国にいるなどと……。

Ar. だって、その男は気前のよい慈悲で膨れ上がった頭陀袋を持参していたのですよ。

Co. 分りますな。だけど、天国までの道のりは随分長いでしょうに。そこに至

13 原文では、*dignius quod vino inscriberetur quam aeri*（「銅よりも酒に刻み付けられるほうがふさわしい」）となっており、古代ローマで青銅の板の上に錫で法を刻み付けた故事に倣ったものである。つまり、犯すことの出来ない厳しさを持った決定を示すものであるが、文脈の中で本文のように意識したものである。

るまでの道筋には追剥ぎがいっぱいいて、決して安全ではないと聞いたことがありますが。

Ar. そうです。でも、彼はパスポートを持っていたからすっかり守られていたのですよ。

Co. 何処の言葉で書かれているのでしょうかな。

Ar. ローマです。

Co. ほほう、それで安全というわけか。

Ar. もし彼が、ラテン語を知らないような守護神にたまたま出くわさなければの話ですが。その時には、もう一度ローマに戻って新しいパスポートを手に入れる必要がありますね。

Co. あの世では、パスポートが死人にも売られているとおっしゃる？

Ar. 勿論ですとも。¹⁴ところで、あなたがおっしゃった楽しみを私たちは何時手に入れることが出来ましょうか。

14 この対話の初出である、1522年3月版では本文のとおりであるが後になって数行が加えられるようになった。註番号を振った後から次のような付加である。Co. Sed interim illud mihi monendus es, ne quid effutias incogitantius: jam enim corycaeis plena sunt omnia. Ar. Ego vero nihil elevo indulgentias, sed combibonis mei stultitiam rideo, qui quum esset alioqui nugator nugacissimus, salutis suae proram, ut ajunt, ac puppim in membrana collocarit potiusquam in correctis affectibus. この付加は、同じ1522年の次の版から加えられるようになるが、そのうち jam enim corycaeis plena sunt omnia の一文はさらにその次の版1523年8月版から加えられているものである。現在出ているそれ以後の版は、この版に従って全文を採用している。

Co. とところで、あなたは無思慮にべらべらしゃべることが無いように注意して下さいよ。だって、今やそこいらじゅうにスパイがいるかもしれませんからな。

Ar. しかし、私は贖宥を蔑ろにしようというのではありません。そうではなく、呑み仲間の馬鹿さ加減を嘲笑っただけなのです。彼らは要するに最もこっけいな法螺吹きなのですから。彼らは自分の救いを矯正された生活というよりも、むしろ謔にもあるように、徹底的に羊皮紙の上に置いているのです。

ここから、本文の「ところで」に続いていくのである。

Corycaeis. を「そこいらじゅうにスパイがいる」と訳したのは、『格言集』の解説を援用したものである。つまり、この言葉は *Κορυκαῖος ὑποάκουτο* 即ち、ラテン語では *Corycaeus auscultavit* (Corycus の人が聞き耳を立てている) となる。これは Corycus がパンフィリアの非常に高い山に囲まれた多くの港を持った場所であり、商人達が船荷を満載して出て行くのを嗅ぎつけて、海賊が待ち伏

Co. ああ、何時でも、お好きな時に。一寸した飲み会を準備しましょうや。私達の修道会の人間を招くわけです。そこで、嘘を競い合うことになるのですな。お互いの嘘を十分楽しみましょうや。

Ar. どうぞ、御勝手に。

せするということからできた諺で、何か隠して企てを行う場合に、注意深く不意を襲って捕える場合に用いられる言葉であった。Adagia, 144, ASD, II-1, p.258-60参照。

この台詞が、1523年版から新しく付け加えられているということは、エラスムスの廻りにも彼の異端性を嗅ぎまわっているスパイまがいの神学者たちの存在を感じることが出来る。そのような自身の状況を、対話の中に滑り込ませるのはエラスムスの得意とする所である。

「諺にもあるように、徹底的に……」というのは、Prora et puppis（船首から船尾）であり、頭为天辺から爪先まで、つまり事柄の全体を示すもので、黙示録に見られる「私はアルファでありオメガである」も同じである。Adagia, 8, op. cit., p.120-121. 従って、エラスムスは救いを求めて巡礼に行ったり、贖宥状を買う人々が自分の生活を省みることなく徹底的に迷信的な仕方、それを求めることを揶揄しているといえる。